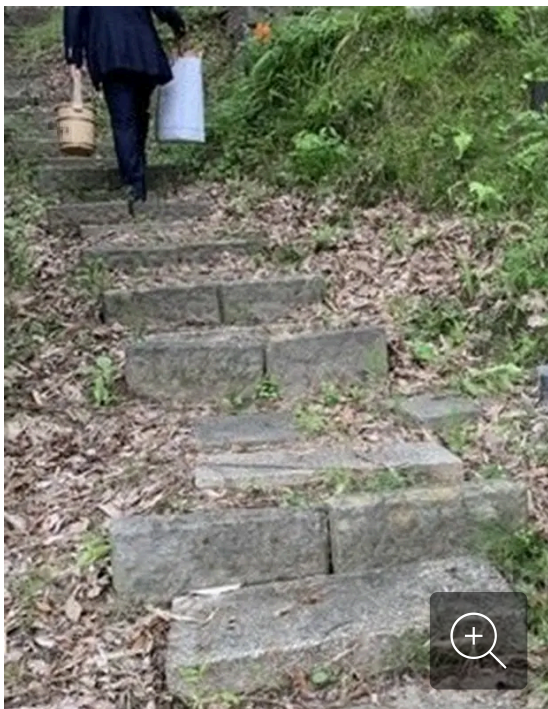


弔いのカタチ

「結局はカネなのか」 説教2時間半、墓じまい交渉で“幻滅”するまで

平塚雄太 暮らし・学び・医療 | 速報 | 家族・子育て

毎日新聞 | 2024/7/17 14:00 (最終更新 7/17 14:00) 有料記事 2055文字



女性が墓じまいした先祖の墓に至る坂道。墓は急斜面の上であり、夏に掃除に訪れた母が体調を崩したこともあったという＝本人提供（画像の一部を加工しています）



女性が墓じまいした先祖の墓＝本人提供（画像の一部を加工しています）

「必ず私たちの代で終わらせる」

墓じまいの決意は固かった。

しかし、お寺で待っていた事態が元々少なかった「信仰心」をさらに薄れさせ、供養は紆余（うよ）曲折を経ていった。

「付き合いもやめていい」

2019年秋。東京都内に住む70代の女性は、長野県内に住んでいた母を亡くした。長野の実家は無人になり、その近所にある先祖代々の墓の維持も難しくなった。

墓は急斜面の上に位置し、足を運ぶのも一苦労。以前、夏に母が掃除に訪れて体調を崩したこともあった。枯れ葉の片付けや雑草抜きに苦しめられた母は生前、「私が死んだらお寺との付き合いもやめていいからね」と言い残していた。

そこで、女性は母の死をきっかけに、墓から遺骨を取り出して墓石を撤去する「墓じまい」を決めた。遺骨は都内の永代供養墓に移すことにした。

20年春、実家にほど近い菩提（ぼだい）寺に電話で相談すると一喝された。

「そういう話は電話で済むものではない」

新型コロナウイルスの感染防止が叫ばれていた時期だ。現地に出向くわけにもいかず、計画は先延ばしにせざるを得なかった。

住職の息子の学費も…

ようやく実行に移したのは22年春。同じく都内に住む弟とともに長野のお寺へ向かった。

待ち構えていたのは、お寺を仕切る僧侶とその母親だった。



寺院 = ゲッティ

「寺を離れると他の檀家（だんか）さんの負担が大きくなって迷惑がかかる」。代わる代わる、墓じまいを断念するように訴えかけられた。

その「説教」は2時間半に及んだ。本堂などを案内され、いかにお寺が荒廃しているかも力説された。

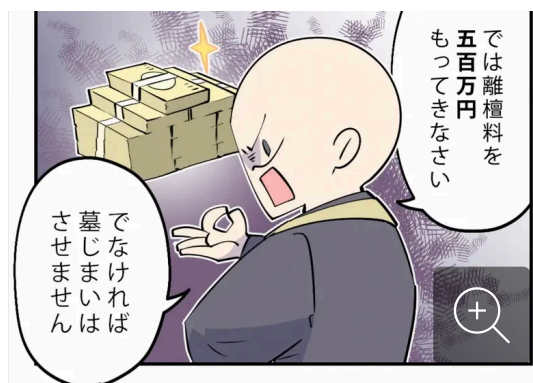
女性の実家がお寺のために何もしてこなかったわけではない。過去に本堂の工事のために100万円を寄付した。管理費も年数千円程度だが常に払ってきた。

「住職の息子が仏教系大学に行くため」と寄付を求められたこともある。

話し合いはかみ合わなかった。強調されたのは、経済面における檀家の必要性ばかり。幻滅してお寺を後にした。

弟の「最後通告」

その後、お寺とは2カ月にわたって弟が電話でやりとりを続けた。



墓じまいのサポートサービス「わたしたちの墓じまい」に寄せられた相談事例をもとにした漫画。お寺

墓を移すには自治体の改葬許可が必要になる。そのためには、埋葬を証明する書類をお寺からもらわなければならない。

「80万円払わないと証明書は出せない」とお寺側は譲らなかった。複数回の交渉でもらちが明かず、弟が「最後通告」をした。

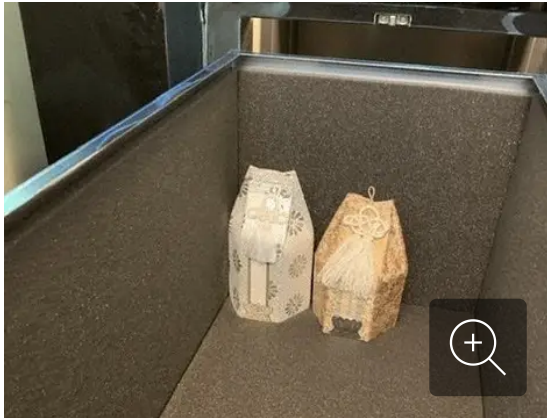
から高額な離壇料を請求された場面を描いている＝
「わたしたちの墓じまい」のホームページより

「では墓は私の息子に継承します。私はきちんと供養するつもりでしたが、息子は他の宗教の信者になるかもしれない。そうしたらいずれ無縁墓となるでしょう」

う」

この発言を機にお寺側も歩み寄り、「閉眼（へいがん）供養料」を「お気持ち」で支払うことで合意し、証明書が出た。女性は10万円を包んで渡した。

「土葬」がネックに



3年かかって墓じまいをした女性の先祖の遺骨。東京都内の永代供養墓に移された＝本人提供

墓の撤去工事は、菩提寺が紹介する石材店では割高になるため断った。独自に業者を探し、それでも約160万円かかった。

山あいにある墓の下には江戸時代に土葬された遺体も眠っていることがネックになった。お寺側の「完全に更地にするように」という要望をかなえるには仕方がない出費と割り切った。

全ての遺骨が都内に移されたのは22年12月。母の死から3年が経過していた。

「やっと終わって一安心した。肩の荷が下りた」

そう女性は胸をなで下ろすが、お寺側の対応には失望感をにじませる。

「現世の人を救うのがお寺だと思っていたが、結局は金だった」

変わる「離壇料」

少子高齢化と過疎化で増える「墓じまい」の中で、お寺との関わりをどう考えればいいのか。



お寺との交渉などのサポートサービス「わたしたちの墓じまい」を展開するフーフー（神奈川県藤沢市）の高木敏郎代表（49）は「交渉では、無縁墓になるよりはきちんと片付けてもらった方がいい、と寺側に理解をお願いする」という。お寺側も無縁墓が増えれば管理が難しくなり、困るためだ。

墓じまいのサポートサービス「わたしたちの墓じまい」を運営している高木敏郎さん。離檀料をめぐるお寺側の姿勢も変化しつつあるという = 神奈川県藤沢市で2024年5月15日、平塚雄太撮影

法的根拠はないとされるが、檀家を離れる側が菩提寺に金銭を支払うこともある。その名目はさまざまで、「離檀料（りだんりょう）」とも呼ばれる。

高木さんが13年にサービスを始めた当初は離檀料をめぐる交渉が難航しがちだったが、お寺側の姿勢も変化しつつあるという。

「以前は何百万円と離檀料を請求してくる寺が多かったが、最近は請求するとしても数十万円程度になってきた。自前で合葬墓を作り、『そこにご先祖の遺骨を移さないか』という寺も出てきた。墓じまいも浸透してきたのでしょう」。そう受け止めている。【平塚雄太】

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagrapy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.